

# Essay

Sapiarc.com

2009年12月29日(2009-20)

## 今年一番うれしかったこと

1年があっという間に終わってしまった。時の過ぎ去る速さは、年齢に比例しているのではないかと思うほどだ。

2009年という年は、日本人にとっても世界中の人たちにとっても、記憶に残る年になるのではなかろうか。鮮烈な印象とともに登場したオバマ大統領、日本では8月30日の衆議院議員選挙での民主党の圧勝、政権交代。

オバマ氏は、核兵器廃絶や二酸化炭素排出量削減に向けて取り組むことなど、非常に良い政策を掲げているのだが、アメリカ国内の支持率は下がっている。その主な原因は、彼が推進に意欲を燃やしている新しい医療保険制度の導入に対して依然として強い抵抗があることによる。これについては、ようやく上下両院での承認が得られたようだが、一般の受けは必ずしも良いとは言えない。また、景気が上昇しないこと、アフガニスタン問題が長引いていることへのアメリカ国民の苛立ちもある。

日本では、鳩山内閣に対する危惧の念は日増しに強まっているように思う。おそらく、今後内閣支持率は下がり続け、1箇月か2箇月で不支持率と拮抗するだろう。私は、平成22年度予算の編成に対する鳩山氏や主な閣僚の発言には最初から驚き呆れた。行政経験のない人たちが政治を担うとどういうことが起きるかが今回ほどハッキリと見えたことはない。今の政治については、いくらでも言うことがある。しかし、ここ

で言っても仕方のないことを言うのは止めよう。

この「ひとこと」は、今年最後のものになる。そこで、今年私が一番うれしく思ったことを書いて、多少なりとも明るい気分で2009年を送りたいと思う。

かなり前から、私が気にしていたことがあった。それは、16年前に東京化学同人社から出版した田隅三生編著「FT-IRの基礎と実際」第2版がかなり前に絶版になっていることであった。本来は、今から7、8年前までに第3版を出版しておくべきだったと思う。この本の第1版を出版したときの経緯などについても述べておくことは必要かもしれないが、ここでは触れないことにする。とにかく、この本の第3版に対する需要は、少なくとも私の感じとしては、相当に高い。

それで、第3版を出そうとして努力したのだが、出版不況の現在、東京化学同人社は引き受けなかった。そこで、日本分光学会に頼んで、この学会の雑誌「分光研究」に、講座シリーズ「赤外分光測定法－基礎と最新手法」として、2010年と2011年の2年間にわたって12回連載してもらうことになった。ここまで漕ぎつけるのに、2008年の10月から半年ほどかかったのだが、分光学会理事会と分光研究編集委員会の協力は大変有り難かった。また、私が執筆を依頼した人たちが皆快諾してくれたこともうれしいことだった。

この改訂版の英文版を作って出版したいというのが、元々私が考えていたことであつた。それについては、2008年8月にロンドンで国際ラマン分光学会議が開かれたときに、分光関係の書籍を多数出版しているWiley-Blackwell社の担当者について、ある程度まで了解を得ておいた。

2009年9月になって、Wiley-Blackwell社との本格的な交渉を始め、10月末には同社の最終的な同意を得ることができ、今月半ばには編者としての私と同社との契約も終わった。その契約では、今から3年後の2012年末までに英文版（題名は“Introduction to Experimental Infrared Spectroscopy”）を出版することになっている。

この交渉の過程で、私にとってとくにうれしいことがあつた。それは、W-B社が、この出版計画について、赤外分光学の研究者とそうではない研究者6人に対して行ったアンケートへの回答に書かれていたことである。回答は匿名で行われた。出版の実際のいろいろな点について疑問を呈した人はいたが、6人全員が出版計画を大筋では支持してくれた。それ以上にうれしかったことは、6人全員からの私個人に対する評価が高かつたことである。その6人はイギリスを含むヨーロッパ諸国、アメリカ、カナダ、オーストラリアのどこかの現役研究者であることは間違いない。

私への評価は次のとおりであつた。①「編者は赤外分光学の分野の指導的研究者である」、②「田隅教授は世界の指導的分光学者のひとりである」、③「田隅教授は振動分光学の指導的研究者のひとりで、とくに高分子に関してそうであり、この分野で当然得て然るべき国際的評価を得ている」、④「私は田隅教授を個人的によく知っている。彼は経験を積んだ科学者で、年齢が高いにも拘わらず常に新しい状況に通じている。」、⑤「田隅教授の時間分解赤外分光法やタンパク質の赤外スペクトル研究

への貢献はよく知られている」、⑥「ISI Web of Scienceで調べたところ、編者は多数の論文を發表しており、いずれもよく引用されている。明らかに、彼はこの分野の専門家であり、同分野の他の研究者から高く評価されている人物である」。

私が東大を定年で退職してから12年以上、埼玉大学を定年退職してからも7年以上が経過した。当然のこととして、この数年間に發表した論文は数えるほどしかなく、国際会議への出席回数も少ない。それにも拘わらず、海外の研究者は私を現役研究者と同様に扱ってくれている。これを励みとして、上記の講座シリーズと英文版を完成したいと思っている。（おわり）